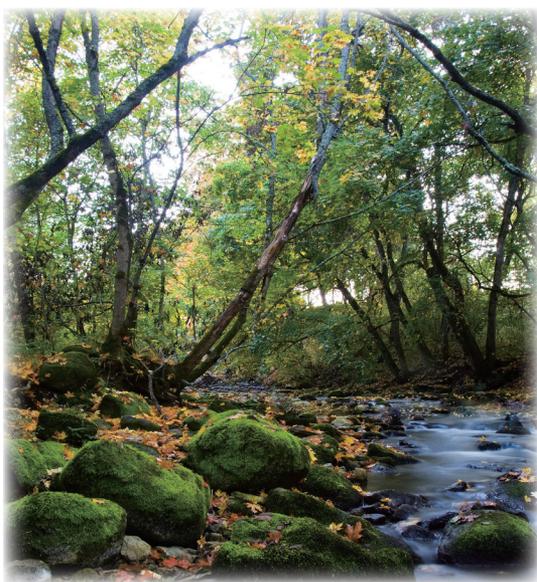


永遠の真理

ETERNAL TRUTH



2016年 9月

「クリスチャンの節制（Ⅲ）」 「聖化された生涯」 「第五の封印と第六の封印」

永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

今月の聖書勉強

「クリスチャンの節制(Ⅲ)」

4

聖書の教え

朝のマナ

「聖化された生涯」

7

今日のわたしの生涯

現代の真理

「第五の封印と第六の封印」

38

七つの封印と生ける神の印

力を得るための食事

「カウザ・レ・イエナ」

46

お話コーナー

「イエスさまの子供時代(Ⅱ) - 過越の祭」

48

イエスの物語

教会

【正丸教会】

〒368-0071 埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

電話：0494-22-0465

FAX：0494-40-1045

【高知集会所】

〒780-8015 高知県高知市百石町 1-17-2

電話：088-831-9535

【沖繩集会所】

〒905-2261 沖縄県名護市天仁屋 600-21

電話：0980-55-8136

アクセス

ホームページ：<http://www.4angels.jp>

メール：support@4angels.jp

発行日 2016年8月31日

編集&発行 SDA 改革運動日本ミッション

〒368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: Dreamstime on front cover;

HighRes on pages 8, 52, Sermon View on back cover.

神はリバイバルと改革を求めておられる

エズラが働いたところは、どこでも聖書研究のリバイバルが起こった。人々に教える教師が任命された。主の律法が高められ、光栄あるものとされた。預言者の書が研究された。そしてメシヤの来臨を予告した聖句は、悲しみ疲れた多くの人の心に希望と慰めを与えた。……

この地上歴史の最後の時代にあっても、シナイで語った声は今なお、「あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない」と宣言している（出エジプト記 20:3）。人間は神のみこころに逆らって自分の意志に従うが、命令の言葉を沈黙させることはできない。人間の心は、より高い権力に対する義務を逃れることはできない。いろいろの説や推論があふれていることであろう。人間は啓示に対抗して科学を支持し、神の律法を廃そうとするであろう。しかし、「主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ」という命令が、なお一層力強く発せられるのである（マタイ 4:10）。

主の律法を弱めるとか、あるいは強めるといったことはないのである。律法はこれまでどおり、今も同じである。律法は常にそれ自体が聖であって、正しくかつ善なるものであったし、今後も常にそうなのである。律法は廃止したり、変更したりできない。律法を「光栄あるものとする」、または「軽んじる」というのは、ただ人間の言葉に過ぎない。……

キリスト者は、やがて世界に、圧倒的驚きとして起ころうとしている事件の、準備をしなければならない。そして彼らは、神の言葉を忠実に研究して、その教えに生活を調和させようと努力することによって、この準備をしなければならない。永遠に関する恐るべき問題は、空想的でただ言葉と形式だけの宗教以上のものを要求している。この宗教においては、真理が除外されているのである。神はリバイバルと改革を求めておられる。講壇からは、聖書、そして聖書のみ言葉が語られなければならない。しかし聖書の力は奪い去られているので、その結果は霊的生活の低下となってあらわれている。今日の多くの説教は、良心を覚醒させて魂に生命を与える、神の力に欠けている。聴衆は「道々お話しになったとき、また聖書を説き明してくださったとき、お互の心が内に燃えたではないか」と言うことができない（ルカ 24:32）。生ける神を叫び求め、神の臨在を熱望している者がたくさんある。彼らの心に神の言葉を語ろう。これまでただ伝説と人間の説と、格言だけを聞いていた人々に、魂を新たにして、永遠の生命に至らせることができるおかたの声を聞かせよう。（国と指導者下巻 224-227）

16章 クリスチャンの節制(Ⅲ)

栄光の王国で

新しくされた地では、悪人が滅ぼされたのに、肉食の動物でさえ、初めの時のように草食になります(創世記 1:30; イザヤ 11:4-9; 65:25; エゼキエル 47:12)。

病気に対処する

わたしたちは創造によって(創世記 1:27; 2:7)、また贖いによって(コリント第一 6:19, 20) 神の所有です。人はちりから、神のみかたちに創造されました。この生ける機械は三つの部分から成り立っています。そして、これらは具体的な自然の法則によって支配されています。それらを傷のないものとして聖化し、保つことが神のご計画です(テサロニケ第一 5:23)。神の宮である自分の体をどのように扱うかについてすべての人が知識を持っている必要があります。命と健康は神からわたしたちへの賜物です。

病気はわたしたちの体が乱用された結果です。そのような場合、原因が確かめられ、有害な環境は変えられ、悪習慣は正されるべきです。自然はそのとき、毒を排除し、体の中のバランスを再び確立するために助けを受けるようになります。病気の予防と対処の双方において最善の方法は、神がわたしたちのために備えてくださった自然療法を用いること、すなわち、食事、衛生、新鮮な空気、日光、節制、休息、運動、水、ハーブ、土、そして神の力に頼ることなどです(創世記 1:29; 3:18; ペテロ第二 1:6; マルコ 6:31; 創世記 2:15; 列王記下 5:10, 14; 20:7; ヨハネ 9:6, 7; 詩篇 103:2, 3; マタイ 8:6-13; マルコ 5:25-34; ルカ 5:20, 24, 25; 詩篇 104:14)。

「苦しみをいやしてもらった多くの人々に、キリストは、『もう罪を犯してはいけない。何かもっと悪いことが、あなたの身に起るかも知れないから』と言われた(ヨハネ 5:14)。こうしてイエスは病気が神の定められた自然と霊的な法則を犯した結

果であることを教えられた。人が創造主の計画に調和した生活を送りさえすれば、この世の大きな不幸は存在しないであろう」（各時代の希望下巻 371, 372）。

「多くの人々はもし健康の法則どおりに生活すれば、薬物を一粒も飲まずに回復するのである。薬を使う必要はほとんどない」（医事伝道 259）。

SDARM の信仰の原則に記載されている「わたしたちは有毒な投薬療法を拒否し、あらゆるワクチンに反対である」という記述は次のように明確にされている。

自然の予防法また療法を用いるよう勧めることは、急性の健康上の問題と混同されるべきではありません。緊急事態は医療専門家によって対処されるべきです。次の警告に注意しましょう。

「わたしは、健康改革の諸原則に従っていると公言しながら、初心者が病気の取り扱いを引き受けることに対して反対の声をあげる。神はわたしたちが彼らの実験台になることを禁じておられる！」（教会への証 2 巻 375）。

主がわたしたちに健康改革の諸原則に関する光を送ってくださった主な理由は、1844 年以来、わたしたちが贖罪の日の本体（ダニエル 8:14）、すなわち、わたしたちの体は「神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげ」られるべき時に生存しているからです（ローマ 12:1）。

「医者治療において、薬物の使用を増やしていく代わりに減じようますます努力すべきである。A 医師が健康静養所へ来た時に、衛生についての自分の知識と実践をわきへ置き、ほとんどすべての病気にホメオパシー薬（同毒薬）を投与した。これは、神が与えてこられた光に反していた。こうしてわたしたちの民、すなわち、ほとんどあらゆる形態の薬を避けるように教えてこられた人々が異なる教育を受けていた。」（セレクトド・メッセージ 2 巻 282）

衣服と化粧

神は人全体の健康を視野に入れておられるため、わたしたちの健康に明らかに反作用を及ぼす衣服はすべて神のみ言葉の中にはっきりと禁じられています。例えば、自由な呼吸を制限するもの、背骨のゆがみや何であつても体の変形を生じさせるもの、また化粧や毛染めに使用されるものなどしばしば体につける不健康な化学物質は何でもそうです（出エジプト記 15:26）。

健康的な衣服

「最も衛生的な衣服をととのえるためには身体各部の必要を入念に研究しなければならない。気候、環境、健康状態、年齢、職業なども考慮しなければならない。服のすべての部分はゆったりして、血液循環を妨げたり、自由で完全で自然な呼吸を妨げたりしないようにしなければならない。身につけるものはすべてゆったりとして、腕をあげると服がそれにつれてあがるようであなければならない。」(ミズリー・オブ・ヒーリング 271)

「女性の間で、不健康な衣服のゆえに生じた苦しみは計り知れない。多くの人々がファッションの要求に応じることによって、一生病人となったのである。健康と命は飽くことを知らない女神の犠牲とされてきた。多くの人々は自分の体を好きなように扱う権利があると考えているかのようなのである。しかし、彼らは自分たちの体が自分自身のものではないことを忘れていた。彼らをかたち造られた創造主は、彼らが軽々しく投げずてることのできない要求を彼らにしておられる。わたしたちの生存の法則に対するすべての不要な不法は、事実上神の律法の違反であり、天の目には罪である。創造主は人の体をどのように形づくるべきかご存知であった。このお方はドレスメーカーの美の概念について、彼らに相談される必要はなかった。自然において美しく栄光に満ちたすべてのものを創造された神は、人の形をどのように美しく健康的に造るかを理解しておられた。このお方のご計画に対する近代の改善は、創造主への侮辱である。それらはこのお方が完全にされたものを変形させるのである。」(クリスチャン節制と聖書の衛生 87, 88)

「証の書を信じると公言している多くの人々が与えられた光を無視して生きている。衣服改革は、ある人々からは非常に無関心に、また他の人々からは軽蔑をもって扱われている。なぜなら、そこには十字架が伴っているからである。この十字架のゆえにわたしは神に感謝する。それはまさにわたしたちが神の戒めを守る民を世から区別し、分離させるために必要なものである。衣服改革はわたしたちにとって、昔のイスラエルにとっての青いふさに相当する。誇り高い人々、また自分たちを世から分離させる聖なる真理に対する愛を持っていない人々は、そのわざによってそのことを示す。神はご自分のみ摂理のうちに、わたしたちに健康改革に関する光を与えてこられた。それによってわたしたちがそれに関する意味をみな理解し、それがもたらす光に従い、そして自ら正しく生活することによって健康を持つことができるためであり、こうしてわたしたちが神に栄光を帰し、他の人々にとって祝福となることができるためである。」(教会への証 3 巻 171)

今日のわたしの生涯

My Life Today



9月「聖化された生涯」

全く聖化された体と心と霊

「どうか、平和の神ご自身が、あなたがたを全くきよめて下さるように。また、あなたがたの霊と心とからだを完全に守って、わたしたちの主イエス・キリストの来臨のときまで、責められるところのない者にして下さるように。」(テサロニケ第一 5:23 英文訳)

聖書で示されている聖化は人の存在全体、すなわち霊と心と体で行なわなければならない。ここに完全に自分を捧げるといふ真の見解がある。パウロは、テサロニケの教会がこの大いなる祝福を喜ぶことができるようにと、次のように祈っている。「どうか、平和の神ご自身が、あなたがたを全くきよめて下さるように。また、あなたがたの霊と心とからだを完全に守って、わたしたちの主イエス・キリストの来臨のときまでに、責められるところのない者にして下さるように」(テサロニケ第一 5:23 英文訳)。……

真の聖化は神のみ旨への完全な一致である。反抗的な思いや感情は克服され、イエスのみ声 新しい人生を目覚めさせ、全人格に浸透する。真に清められている人々は自分自身の意見を善悪の基準にしない。彼らは頑迷でも、ひとりよがりでもなく、自分を見失わないよう用心して、自分たちに約束が与えられていても、その約束の基準となっている条件に従うのに失敗するのではないかと常に恐れている。

聖書の聖化は強い感情にあるのではない。ここで多くの人が思い違いをする。彼らは感情を自分の基準にして、気分が高揚したり、幸せな気持ちの時に、自分は清められていると主張する。幸福な感情があつたり、あるいは喜びがないことが、その人が清められているかどうかという証拠ではない。そのような瞬間的な清めはない。真の清めは日々の働きであり、人生が続かぎり続いていく働きである。日毎の誘惑と戦っている人々、自分自身の罪深い傾向に打ち勝っている人々、心と生涯の聖潔を求めて努力している人々は、清められていると自慢して主張することはない。彼らは義に飢え渴いており、彼らにとって罪は非常に罪深いものに思える。(聖化された生涯 7-9)

真の聖化は日毎に自己に死に、日毎に神のみ旨に従う以外にない。(聖化された生涯 237)

聖化の実例

「夫たる者よ。キリストが教会を愛してそのためにご自身をささげられたように、妻を愛しなさい。キリストがそうなさったのは、水で洗うことにより、言葉によって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、また、しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、清くて傷のない栄光の姿の教会を、ご自分に迎えるためである。」(エペソ 5:25-27)

ここに聖書でいう聖化がある。これは単なる見せかけや外観ではなく、真理という管を通して受ける聖化であって、心に受け入れられ、実際に生活の中で実行される真理である。

人として見なされていたイエスは完全であったが、なお恵みのうちに成長された。ルカ 2:52 に「イエスはますます知恵が加わり、背たけも伸び、そして神と人から愛された」と記されている。最も完全なクリスチャンであっても、絶えず神の知識と愛を増していくことができる。……

「そして、わたしたちの主また救主イエス・キリストの恵みと知識とにおいて、ますます豊かになりなさい。栄光が、今も、また永遠の日に至るまでも、主にあるように、アメン」(ペテロ第二 3:18)。

聖化は一瞬間、一時間、あるいは一日の働きではなく、恵みのうちにある絶え間ない成長である。わたしたちは自分の争闘が次の日にどれほど強いものとなるか、一日といえども分らない。サタンは生きており活動しているので、わたしたちは毎日、彼に抵抗するために助けと力を神に熱心に叫び求める必要がある。サタンが支配するかぎりわたしたちには服従させるべき自己、打ち勝つべき弱さがあり、立ちどまるどころはなく、わたしたちが完全に到達したと言える地点はない。……

クリスチャンの生活は常に前進である。イエスにご自分の民を精錬し清めるお方として座しておられるので、このお方のかたちがクリスチャンの中に完全に反映されるとき、彼らは完全に聖い者となり、移される用意ができる。(教会への証 1 巻 339, 340)

すべて生きているクリスチャンは、聖なる生活で日毎に前進する。彼が完全に向かって前進するとき、日々神への改心を経験し、この改心は彼がクリスチャン品性の完全、不死という仕上げの一筆のための完全な準備に到達するまで完成しない。(同上 2 巻 505)

服従を通して聖化される

「ゆえにあなたがたは、みずからを聖別し、聖なる者とならなければならない。わたしはあなたがたの神、主である。あなたがたはわたしの定めを守って、これを行わなければならない。わたしはあなたがたを聖別する主である。」(レビ 20:7,8)

アダムとエバは主のご要求をあえて犯した。そして、彼らの罪の恐ろしい結果は彼らの不従順の例に従わないようにというわたしたちへの警告となるべきである。……真理への従順以外に本当の聖化はない。心から神を愛する者は神の戒めをもすべて愛する。清められた心は神の律法の教訓と調和する。なぜならその教訓は聖にして正しく善なるものだからである。(聖化された生涯 49)

真に神を愛し畏れる者は誰もことさらに律法を犯し続けたりはしない。人が罪を犯すとき、その人は律法の有罪判決のもとにあり、自分を奴隷のくびきにつなげる。その人が何を公言しようと、彼は義認を受けていない。すなわち許されていない。

「主のおきてでは完全であって、魂を生きかえらせ」る。服従を通して体と魂、そして霊の聖化が行われる。この聖化は段階的な働きであって、完全の一段階から次の段階へと前進する働きである。(手紙 155、1902 年)

どんなに小さい義務の遂行にあたって、生きた信仰が金の糸のようにその中に織り込まれていなければならない。そうすれば、日毎の仕事の全体が、クリスチャンの成長を助け、イエスを絶えず仰ぎ見るようにする。わたしたちは、キリストを愛しているので、なすすべての事に力がはいるのである。こうして、わたしたちは、タラントを正しく活用することによって、わたしたちをより高い世界に、金の鎖で結びつけることができるのである。これが真の清めである。というのは、清めとは、神のみこころに完全に従いながら、日毎の務めを快活に行なうことであるからである。(キリストの実物教訓 336)

神に従う気持ちが心にあり、これを最後まで続ける努力をするとき、イエスはこの気持ちと努力を人の最高の奉仕として受け入れてくださり、その人の不足をご自身の神としての功績で補われる。(サイン・オブ・タイムズ 1890 年 6 月 16 日)

聖化の実

「あなたがたは、主にあっていつも喜びなさい。繰り返して言うが、喜びなさい。」
(ピリピ 4:4)

墮落したアダムの子供たちは、イエスによって「神の子」となる。「実に、きよめるかたも、きよめられる者たちも、皆ひとりのかたから出ている。それゆえに主は、彼らを兄弟と呼ぶことを恥とされない」。クリスチャンの生活は信仰と、勝利と、神にある喜びとの生活でなければならない。「なぜなら、すべて神から生れた者は、世に勝つからである。そして、わたしたちの信仰こそ、世に勝たしめた勝利の力である」。神のしもべ、ネヘミヤが、「主を喜ぶことはあなたがたの力です」と言ったのは至言である。パウロも言っている。「あなたがたは、主にあっていつも喜びなさい。繰り返して言うが、喜びなさい。」「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって、神があなたがたに求めておられることである。

これが、聖書の改心と聖化の実である。(各時代の争闘下巻 208)

彼〔真に義なる人〕の性質は、神と同胞への愛が十分に吹き込まれているため、キリストの働きを自発的に行う。

その人の影響力の及ぶ範囲内に入ってくる人はみな、彼のクリスチャン生活の麗しさと香りに気づくが、その一方で彼自身はそれに気づかない。なぜなら彼の習慣と傾向はその生活と調和しているからである。彼は神の光を求めて祈り、光の内を歩くことを愛する。天父のみ旨を行うことが彼の食物であり、飲物であって、その生涯はキリストと共に神の内に隠されている。しかし彼はこのことを誇ることもなければ、気づいてもいないように見える。神は主人のみ足の跡にぴったりとつき従っているへりくだった心低い者を見てほほえまれ、天使たちは彼らにひきつけられ、彼らの歩む道の辺りにたたずむことを喜ぶ。彼らは、学識が高いと主張する人々や良い働きに卓越するのを喜ぶ人々からは、価値のない者として見なされ、無視されるかもしれないが、天のみ使いたちは彼らを愛して彼らの周りを火の壁のように囲む。……神の相続人、キリストとの共同相続人になるという特権が人に認められている。(聖化された生涯 11-14)

キリストはわたしのためにご自身を聖別された

「あなたがわたしを世につかわされたように、わたしも彼らを世につかわしました。また彼らが真理によって聖別されるように、彼らのためわたし自身を聖別いたします。」(ヨハネ 17:18, 19)

キリストはご自身を聖別すると宣言されたが、それはわたしたちもまた聖別されるためであった。このお方はわたしたちの性質をご自身の身に受け、なおかつ人間のために完璧な模範となられた。キリストは過ちを犯されなかったが、それはわたしたちもまた勝利者となり、打ち勝った者としてこのお方の王国に入ることができるためであった。このお方はわたしたちが真理によって聖別されるようにと祈られた。真理とは何であろうか。キリストは、「あなたのみ言葉は真理であります」と宣言された。弟子たちは真理に服従することによって聖別されねばならなかった。このお方はまた「わたしは彼らのためばかりではなく、彼らの言葉を聞いてわたしを信じている人々のためにもお願い致します」と言われる。この祈りはわたしたちのためであり、わたしたちはキリストの弟子たちの証を信じている。キリストは、ご自身と御父とが一つであられるように、ご自分の弟子たちが一つとなるようにと祈られる。そしてこの信者の一致が、世に対してご自分がわたしたちをつかわされたことを証するものとなり、わたしたちがご自分の恵みの証拠を担うようにと祈られる。

わたしたちは世の贖い主との聖なる近さに入って、このお方が御父と一つであられるように、キリストと一つになるべきである。神の民が神の御子との一致に入るとき、なんと素晴らしい変化を経験することであろうか!わたしたちの嗜好、傾向、大志、熱情はみなキリストの意志と精神に従い、調和するべきである。これこそ主がご自分を信じる者のためにしたいと願っておられる働きそのものである。わたしたちの生活と態度は、世にあって形づくる力とならなければならない。キリストに従う者たちがイエスのように語り、行動するために、キリストの御霊が彼らの生涯を支配する感化力を持つべきである。キリストは「わたしはあなたからいただいた栄光を彼らにも与えました」と言われる。……

キリストの恵みが、それを受ける者の生活と品性に素晴らしい変化の働きをすべきであり、もしもわたしたちが真にキリストの弟子であるなら、世は、神の力がわたしたちのために何をされたかを見るであろう。なぜならわたしたちは世にいても世の者ではないからである。(ビュー・アソド・ヘラルド 1889年7月2日)

柔和な男女

「主は……へりくだる（柔和な）者を勝利（救い）をもって飾られる」（詩篇 149:4）

聖化の最も尊い実は柔和という恵みである。この恵みが魂の中で最高の位置を占めると、性質はその恵みの感化によって形造られる。絶えず神を待ち望み、神のみ旨に服する。これを理解するとあらゆる神の真理をつかみ、意志は疑ったりつぶやいたりすることなく、あらゆる神の教えにひざをかかめる。真の柔和は心を和らげ、抑えて、思いを、植えつけられた言葉にふさわしいものとする。柔和は思想をイエス・キリストに服従させ、ルデヤの心が開いたように、心を神のみ言葉に向かって開かせる。柔和はマリアと共にわたしたちをキリストの足元に、学ぶ者として座らせる。主は「へりくだる者を公義に導き、へりくだる者にその道を教えられる。」

柔和な者の言葉は決して誇るような言葉ではない。子供の時のサムエルのように「しもべは聞きます。主よ、お話してください」と彼らは祈る。ヨシヤはイスラエルの司令官として最も名誉ある地位に置かれたとき、神のすべての敵にいどんだ。彼の心は大いなる任務に対する気高い思いに満たされたが、天からの使命の暗示に対して、指図を受ける小さな子供の立場に自分を置いた。「わが主は何をしもべに告げようとするのですか」というのが彼の反応であった。……

キリストの学校における柔和は御霊のきわだった実の一つである。これは清める方としての聖霊、この柔和を持つ者が絶えず軽率で衝動的な気質を統制できるようにする聖霊が働く恵みである。……

柔和は、神が大いに評価しておられる心の内の飾りである。……光の球で天を飾っておられるお方は、同じ御霊によって「主はへりくだる者を救いをもって飾られる」と約束された。天のみ使いたちは、主イエス・キリストを着て、柔和で心のへりくだったお方と共に歩む人々を最も慕わしい者として登録する。（聖化された生涯 12, 13）

ダニエルの節制の生涯

「ダニエルは王の食物と、王の飲む酒とをもって、自分を汚すまいと、心に思い定めたので、自分を汚させることのないように、宦官の長に求めた。」(ダニエル 1:8)

ダニエルの生涯は、何が清められた品性を構成するかという靈感を受けた実例であって、すべての人、とりわけ若い人々に対する教訓を提供している。神のご要求に厳格に従うと、体と思いの健康に益がある。道徳上また知的に最高の標準に達するためには、神から知恵と力を求め、生活習慣すべてにわたって厳格な節制をする必要がある。ダニエルとその仲間の経験から、わたしたちは食欲の放縱という誘惑に打ち勝つ原則の勝利の例を見る。この例は、若い人達は、宗教の原則によって肉の欲に打ち勝ち、たとえ大きな犠牲を払っても、神のご要求に誠実に応えることができることを示している。(聖化された生涯 18,19)

ダニエルは至高者の忠実な僕であり、彼の長い生涯は主人であるお方のための奉仕の気高い行為に満ちていた。彼の品性の純潔とゆるぐことのない忠誠は、ただ神のみ前における彼の心のへりくだりと悔悟に等しいものであった。繰り返して言うが、ダニエルの生涯は真の聖化についての靈感を受けた実例である。(同上 39)

真に聖化された人々は、何処にいてもダニエルのように身体上の正しい習慣を保ち、節制と自己否定の模範を他の人々に示すことにより、道徳基準を高める。
.....

クリスチャンは、キリストの奉仕にささげるためのあらゆる才能を活力いっぱいみなぎらせておくために、自分たちの習慣をどれほど気をつけて統制しなければならぬことであろうか。(健康 1882 年 11 月)

健康改革について神が与えて下さった光を大切にする者は、真理によって清められ不死にふさわしい者となるための働きの中で大切な助けを得る。(食事と食物への勧告 59, 60)

エノクの聖潔の生涯

「エノクは……三百年、神とともに歩」んだ。(創世記 5:22)

神との交わりによって、高められ、気高くされ、天の交わりのような生活を送った聖徒の群れが常にあった。彼らは著しい知能と、すぐれた学識の持ち主であった。彼らには、正しい品性を築き、信心について、その時代の人々だけでなく、後世の人々にも教えるという偉大で清い使命があった。……

エノクは、彼が65歳になってむすこを生んだとされるされている。彼は、その後三百年の間神と共に歩んだ。エノクは、そうした初期の時代に、神を愛し、おそれ、神の戒めを守った。……彼は、アダムの口から墮落の暗い物語や、約束に示された神の恵みの喜ばしい物語を教えられて、来たるべき贖い主によりたのんだ。しかし、エノクは、彼の長男の誕生後、さらに高い経験に達し、神とさらに密接な関係にはいっていった。彼は神の子として、自分に与えられた義務と責任を、もっと深く自覚した。子供が父を愛し、父の保護に単純に信頼するのを見たとき、そして、長男に対して深い愛情を自分の心に感じたときに、彼は、そのみ子を人間に賜わった驚くべき神の愛と、神の子らが天の父に対して持たなければならない信頼に関して、尊い教訓を学んだのである。キリストによって示された測り知れない無限の神の愛は、彼の昼夜の瞑想の課題になった。彼は、自分の力の限りを尽くして、いっしょに住んでいる人々にその愛を示そうとした。

エノクが神と共に歩んだのは、恍惚状態や幻を見るようなものではなくて、日常のすべての務めを果たすことにおいてであった。……彼は、家庭においても、人々との交際においても、夫、父、友人、市民として、常に堅く立ってゆるがない主のしもべであった。(人類のあけぼの上巻 80, 81)

三人のヘブル人のゆるがない高潔さ

「ネブカデネザル王は……大臣たちに言った、『われわれはあの三人を縛って、火の中に投げ入れたではないか』。彼らは……答えて言った、『王よ、そのとおりです』。王は答えて言った、『しかし、わたしの見るのに四人の者がなわめなしに、火の中を歩いているが、なんの害をも受けていない。その第四の者の様子は神の子のようだ。』」（ダニエル 3:24,25）

この三人のヘブル人は本物の聖化を持っていた。真のクリスチャンの原則は結果を考えるために立ち止まったりはしない。もしもわたしがこれをしたら、人々は何と思うだろうか、などと考えたり、それをしたならわたしの世間的見通しにどのように影響するだろうかなどと問わない。神の子は、この上なく熱心に切望しながら、神が自分たちにさせようとしておられることを知り、自分たちの働きが神に栄光を帰すことができるようにと願う。主はご自分に従うすべての者の心と生活が神の恵みによって支配を受け、世に燃え輝いている光のようになることができる十分な備えをしておられる。

この忠実なヘブル人たちは生来大いなる能力を持っていた。彼らは最高の知的文化を楽しみ、今は名誉ある立場を占めていた。しかしこのことが彼らに神を忘れさせることはなかった。彼らの能力は神の恵みの聖化する感化力に明け渡された。彼らはそのゆるがない高潔さによって、暗闇から驚くべきみ光の中に招き入れて下さったお方をほめたたえた。おびたしい会衆の前で、神の力と威厳が驚くべき救出のうちにあらわされた。イエスは、燃える炉の中で彼らのそばにご自分の身を置き、ご自分の臨在の栄光によって、高慢なバビロンの王に、それが神の御子以外にはだれもできないことを確信させた。彼らの同僚がみな、ダニエルとその仲間の生活を高貴なものにし、その品性を麗しいものとした信仰を理解することができるまで、天の光がダニエルとその仲間から輝いていた。……

神のみ働きの中で臆病であったり、優柔不断また勇気のない者に、ここでなんという教訓が与えられていることであろう。……この忠実で堅固な品性の持主たちは、高い名誉を求める考えなど持っていないのに、聖化の良い実例となっている。（聖化された生涯 29,30）

クリスチャンはみな聖化という祝福を楽しむことができる。（同上 61）

ヨハネの愛と忠誠

「わたしたちは、神がわたしたちに対して持つておられる愛を知り、かつ信じている。神は愛である。愛のうちにいる者は、神におり、神も彼にいます。」(ヨハネ第一 4:16)

ヨハネの生涯と品性のうちにあらわされた人を信じる愛と無私の深い愛情は、キリスト教会に言い表せないほどの価値ある教訓を提供している。ある人はヨハネがこの愛を神の恵みに頼らないで所有していたと言うかもしれないが、ヨハネは本来品性に重大な欠陥を持っていた。彼は自尊心が強く野心的で、わずかなことにも腹を立て、傷つきやすかった。……

ヨハネはイエスのようになりたいと願い、キリストの愛の変化させる感化力のもとに柔和で心のへりくだった者となった。自己はイエスの中に隠れてしまい、生けるぶどうの木にぴったりと寄りそって一つとなり、このようにして神性にあずかる者となった。キリストとの交わりの結果はそのようになる。これが真の聖化である。

個人個人の品性には際立った欠陥があるかもしれないが、その人がイエスの真の弟子となると、神の恵みの力はその人を新しい人にする。キリストの愛がその人を変え、聖化する。しかし、人々がキリストであると言いつつ、彼らの宗教が生活のあらゆる関係の中で彼らをより良い男女にしないなら、すなわち行為と品性においてキリストの生きた代表者でなければ、その人々はキリストのものではない。(聖化された生涯 41)

ヨハネは真の聖化という祝福を楽しんだ。しかし、使徒は自分が罪のない者であると主張してはいないことに注目しなさい。彼は神のみ顔の輝きの中を歩むことによって完全を求め続けている。神を知っていると公言しながらも神の律法を破る人はその告白に対してうそをついていると使徒は証する。……わたしたちはキリストがそのために死なれた魂を愛し、彼らの救いのために働くべきであるが、一方で罪と妥協すべきではない。わたしたちは反抗する者と結びついて、これを仁愛(めぐみ、いつくしみ)と呼んではならない。神は、ヨハネが彼の時代に、魂を滅ぼす過ちに反対して正義のためにひるまなかつたように、現代にもご自分の民が、世に対して立つようにと要求される。(同上 48)

対照的なヨハネとユダの生涯

「世と世の欲とは過ぎ去る。しかし、神の御旨を行う者は、永遠にながらえる。」
(ヨハネ第一 2:17)

ヨハネとその仲間の弟子たちは、キリストが教師である学校に入っていた。……ヨハネはあらゆる教えを尊んで、絶えず自分の生活が聖なる型、キリストと調和するよう努めた。恵みのうちに成長し、自分の働きにふさわしい者となるために不可欠な柔和、へりくだり、そして愛を明らかにしているイエスの教えは、ヨハネにとって最も価値のあるものであった。……

教訓となる教えがヨハネの品性とユダの品性との間の著しい対照からもたらされる。ヨハネは聖化の生きた実例であったが、一方ユダは信心の外観は保っていたが、その品性は神というよりもサタンのものであった。彼はキリストの弟子であると公言したが、言葉と働きにおいてこのお方を否定した。

ユダはヨハネと同じように型であるキリストについて学び、このお方をまねる同じ尊い機会があった。彼はキリストの教えを聞いたので、神の恵みにより、彼の品性が変えられることもできた。しかしヨハネが熱心に自分の欠点に対して戦いを挑み、キリストに同化するよう努めていた間、ユダは自分の良心にそむき、誘惑に負け、自分をサタンの形に変える不誠実という習慣をしっかりと身につけていった。

この二人の弟子はクリスチャン世界を代表している。全員がキリストに従っていると公言するが、一方がイエスに学びつつへりくだって柔和に歩む間、もう一方は自分がみ言葉を行う者ではなく、ただ聞く者であることを示す。一方は真理によって清められ、もう一方は神の恵みの変える力について何も知らない。前者は日々自己に死に、罪に打ち勝っている。後者は自分自身の肉欲にふけりつづけ、サタンの僕となっていく。(聖化された生涯 44)

主は安息日遵守者を聖別される

「わたしはまた彼らに安息日を与えて、わたしと彼らとの間のしるしとした。これは主なるわたしが彼らを聖別したことを、彼らに知らせるためである。」(エゼキエル 20:12)

ヨハネが述べた主の日は安息日、エホバが創造の大いなるみわざの後で休み、それに基づいて祝福し、聖別された日であった。ヨハネが人々の中に住んでその日に説教をしていた時と同じように、安息日はパトモス島でもヨハネが清く守る日であった。ヨハネは自分を取りまいている不毛の岩のそばで、ホレブの岩山を思いおこし、神が民にご自分の律法についてどのように言われたかを思いおこした。神は「安息日を覚えて、これを聖とせよ」と言われたのである。

神の御子が山の頂きからモーセに語られ、神は岩をご自分の聖所とされた。神の宮は永遠の丘であった。聖なる立法制定者はすべての民が聞いている中で、ご自分の律法を語るために岩山に下られたが、それは、民がご自分の力と栄光の、広大で恐るべき表明によって感銘を受け、その戒めを犯すことを恐れるためであった。……エホバの律法は不変であり、神が律法を書かれた板は堅い石であって、このお方の教訓は変らないことを意味していた。ホレブの岩山は神の律法を愛し、崇敬するすべての者にとって聖なる場所となった。

ヨハネがホレブの光景を熟考していた間に、第七日目を聖別されたお方の御霊が彼に下った。ヨハネは、神の律法を犯したアダムの罪と、その罪の恐ろしい結果とを深く考えた。失われた民族を贖うためにご自分の御子を与えるという神の無限の愛は言葉で表現するにはあまりに偉大であるように思われた。ヨハネが手紙の中で示しているように、彼は教会と世にそれを見つめるようにと呼びかけている。(聖化された生涯 54)

安息日を自分と神との間のしるしとみなす人はみな……神の政府の原則の見本となる。彼らは神の王国の律法を日々の行動に持ち込む。安息日の聖化が自分たちに宿るようにという祈りが日毎になされる。(教会への証 6巻 353)

キリストは真理

「イエスは彼に言われた、『わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。』」（ヨハネ 14:6）

キリストがバプテスマの後でヨルダンの岸辺にひざまずいたとき、天が開かれ、輝く黄金のような鳩の形をした御霊が降りてきて、キリストをその栄光で取り囲み、天から神のみ声が「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」と言われるのが聞こえた。人のために祈られたキリストの祈りは天の門を開き、御父は墮落した人類のための嘆願を受け入れると答えられたのである。イエスはわたしたちの代理者、保証人として祈られたので、今、人類家族は神の最愛の御子の功績によって御父に近づくことができる。この世は、罪を犯したがゆえに天国という大陸から切り離されている。人と創造主との間の交わりは途絶えてしまったが、御父の家に帰ることができるようにと道が開かれた。イエスは「道であり、真理であり、命である」。天国の門は開かれており、神のみ座からの輝きが神を愛する人々の心に光を注ぎ込む。たとえ彼らがこの罪にのろわれた地上に住んでいても、聖なる神の御子を取り巻いた光が、御子のみ足の跡に従うすべての人の道に注がれる。失望落胆する理由はない。神のみ約束は確かで不動である。

「だから、「彼らの間から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。そして、汚れたものに触れてはならない。触れなければ、わたしはあなたがたを受けいれよう。」……あなたは至高者の息子、娘となることを望んでいるのだろうか。……あなたは御子の名によって御父のもとに来ることができる。そしてあなたの嘆願がどれほど不完全で弱々しいものであっても、イエスは無限の力ある御座の前に嘆願を差し出し、このお方の上に注いだ光があなたの上に反映する。あなたは「愛する御子によって受け入れられている。」（ビュー・アズ・ヘルド 1888年2月28日）

真理は聖化する

「真理によって彼らを聖別して下さい。あなたの御言は真理であります。」(ヨハネ 17:17)

神の真理は魂を清める。「わたしは新しい心をあなたがたに与え、新しい霊をあなたがたの内に授け」る。真理の聖化する力が魂に宿り、わたしたちの仕事に持ち込まれ、生活上のあらゆる処理、とりわけ同胞の取り扱いにおいて絶え間ない試金石となるべきである。真理の聖化する力が、わたしたちの家族全員の品性と生涯とを支配する力を持って、家族の中に宿るべきである。(レビュー・アンド・ヘラルド 1885年4月14日)

真理を信じると公言する人々に、真理を実践する必要があることを、わたしは絶えず強く勧めねばならない。これは聖化を意味し、そして聖化とは主の奉仕のためのあらゆる能力を養い、訓練することを意味する。(同上 1906年7月26日)

子供たちに、真理を愛するようにと教えなさい。なぜなら、真理は真理であって、この真理によって子供たちは清められるべきであり、もっと高度な働きに入る資格があるかどうか、また王家の一員、天の王の子となるのにふさわしいかどうかをまもなく決める壮大な調査に耐えるのにふさわしくならなければならないからである。(サインズ・オブ・タイムズ 1894年9月10日)

真理、神の御言の尊い真理には心と品性を聖化する効力がある。わたしたち自身と子供たちの為になされねばならない働きがある。生来の心は、イエスに対してそうであったように、真理を憎む気持ちで満たされている。両親が、子供たちの小さい時から義の道へ子供たちの足を導くことを、自分たちの生涯における第一の仕事としないかぎり、正しい道を選ぶ前に間違った道を選ぶであろう。(レビュー・アンド・ヘラルド 1885年4月14日)

聖化の働きは家庭で始まる。家庭でクリスチャンの人は教会でも世でもクリスチャンである。(同上 1804年2月17日)

真理は高める

「今わたしは、主とその恵みの言とに、あなたがたをゆだねる。御言には、あなたがたの徳をたて、聖別されたすべての人々と共に、御国をつがせる力がある。」(使徒行伝 20:32)

神の靈感を受けた尊い信仰は品性に力強さと気高さを分け与える。神のいつくしみ深さと憐れみと愛が宿るとき真理がますますはつきりと理解できるようになり、心の純潔と思想の清澄を求める気持ちが増え高まる。聖なる思いの雰囲気の中に宿っている魂は、神のみ言葉の研究を通して、神との交わりによって変えられる。真理は非常に大きく遠大で、また非常に深く広いので、自己を見失ってしまう。心は和らげられ、へりくだりと親切と愛に支配されるようになる。

生来の力は聖なる服従のゆえに大きくなる。命のみ言葉の研究から、生徒に、広がり、高められ、気高くされた思いがでてくる。……純潔な考え方をすることによって、彼らは断固とした者となり、あらゆる知的能力が活気づけられる。彼らは自分自身を非常によく教育し、訓練するので、彼らの影響下にあるすべての人は、人が知恵と力の神と結びつくとき、どのような人になることができ、何をすることができるかを見ることができ、(サイン・オブ・タイムズ 1906年10月17日)

神の真理はそれを受け入れる者の品位を下げることは決してない。真理を受け入れる人に及ぶ真理の影響力は、絶えずその人を高尚にしていく。……

真理によって清められた人々は、自分たちのよみがえられた主の代理者、また真理の力の生きた推薦状である。キリストの宗教は嗜好を精練し、判断力を清め、魂を気高く、純潔にまた高尚にし、クリスチャンを天のみ使いたちの社会にますますふさわしいものとしていく。(レビュー・アンド・ヘラルド 1889年12月3日)

神は、わたしたちが自分の思いを偉大な思想、純潔な思想で満たすようにと命じられる。……聖書の教えを喜ぶ精神を持っている者は、誰も聖書から何か助けとなる思想を得ないまま、聖句を一節といえども読んでいくことはありえない。必ず助けとなる思想を得ることができる。(サイン・オブ・タイムズ 1906年9月19日)

真理は純潔にする

「あなたがたは、真理に従うことによって、たましいをきよめ、偽りのない兄弟愛をいただくに至ったのであるから、互に心から熱く愛し合いなさい。」(ペテロ第一 1:22)

湖水に咲く水蓮は、その根をごみや粘土の下深くおろし、穴の多い茎を通して、成長の助けとなるものを得、湖の水面に純潔な姿で、そのしみのない花を咲かせる。

水蓮はそのしみのない美しさを汚し、傷つけるものをすべて拒む。……青年に、神を畏れ、神を愛する人々との交わりの中にいるようにさせなさい。なぜなら、気高く堅固な品性は湖の水面にその純潔な花を開く水蓮によってあらわされているからである。彼らは士気をくじくような影響力で形造られるのを拒み、純潔で高貴な品性を発達させる助けとなるものだけを自分自身に集める。彼らは神のかたちと同じになろうと努めている。(ユース・インストラクター 1893年1月5日)

純潔な心は、神の評価ではオフルの金よりも、もっと尊い。純潔な心は神が住まわれる宮であり、キリストがご自分の居る場所として定められる聖所である。純潔な心は安っぽい卑しいすべてのものの上であり、輝く光であって、高く掲げられ、清められた言葉の宝の家である。純潔な心は神のかたちが認められる場所であり、そこでの最高の喜びは神のかたちを見つめることである。それは神にあって満足とただ喜びを、そして完全を見出す心であり、その思想と意図と目的は信心と共に生きている。そのような心は聖なる場所であり、あらゆる価値あるものの宝庫である。……

心の純潔な人の思想はキリストに捕えられる。自分がどのようにすればもっと神に栄光を帰すことができるかと考えることでその思いは占められる。(手紙 117、1897年)

そうであれば、純潔と聖潔を求めることは、わたしたちにとって自然なことになる。……自分にゆだねられた愛の任務を実行することが天使にとって自然であるのと同様に。(レビュー・アンド・ヘラルド 1888年10月23日)

真理は明らかにする

「あなたがたの心の目を明らかにして下さるように、そして、あなたがたが神に召されていて、望みがどんなものであるか、聖徒たちがつぐべき神の国がいかに栄光に富んだものであるか」(エペソ 1:18)

すべての真の知識と真の発達の源は、神を知ることの中にある。物質界でも精神界でも霊界でも、罪の弊害を除けば、そこに見られるすべてのものに、この知識が表わされている。どういう方面の研究に従事しようと、真理に到達しようとの純粋な目的をもっているかぎり、われわれは、万物の中に働き、また万物を通して働いておられる目に見えない大能の神に触れるようになるのである。人間の思いは神のみことと交わり、有限な人間が無限の神と交わるようになるのである。こうした交わりが人の知、徳、体におよぼす影響には測り知れない価値がある。

この交わりの中に最高の教育が見いだされる。それは神ご自身の方法による教育である。神は、「あなたは神と和らいで、(原文・神を知れ)」と人類に仰せになっている。(教育 3)

「御使たちも、うかがい見たいと願っている」ほどのテーマを研究し、考えるときに、天使たちを友とすることができる。……この世にあつて天のふんいきの中に住み、この世の悩みと誘惑の中にある人々に希望の思いと聖潔をあこがれる思いをあたえ、同時に自らは、目に見えない神とますます密接な交わりにはいり、神と共に歩んだ古代の人と同じに、いよいよ永遠の世界の門口に近づき、そしてついには開かれた門を通してそこにはいることができる。そこでは自分が見ず知らずの人間ではないことに気がつくであろう。自分にあいさつの言葉をかけてくれる声は、地上にあるとき、目には見えなかったけれども、友として交わった聖者たちの声であり、この世において聞きわけそして愛することをおぼえた声である。神のみ言葉を通して、天との交わりの中に暮らしていた者は、天における交際にも心やすさを感じるのである。(同上 136, 137)

「真理の御霊」によって導かれるなら、その人はすべての真理に導かれる。……彼は天の目に尊いものとなる。(教会への証 5 巻 439)

真理は一変させる

「主よ、あなたの幕屋にやどるべき者はだれですか、あなたの聖なる山に住むべき者はだれですか。直く歩み、義を行い、心から真実を語る者、」（詩篇 15:1, 2）

わたしたちは真理の原則を提示し、その原則が人々の心に働きかけるようにしなければならない。わたしたちは木から望むままにたびたび葉をつみ取ることができるが、これが木を枯らす原因とはならない。次の年に葉はまた以前のように繁るのである。しかし木の根元におのを打ち込むなら、葉が落ちるだけでなく、木も枯れてしまう。真理の愛のうちにこれを受け入れる人々は、世に対して死に、自分たちの聖なる主のように柔和で心のへりくだった者となる。心が正しくなればすぐに、衣服も会話も生活も神のみ言葉と調和するようになる。わたしたちはみな神の力強いみ手のもとで自分を謙虚にする必要がある。永遠の真理という壇の上にわたしたちの足がしっかりと立つことができるよう、神がわたしたちを助けてくださるようお願い。（ヒストリカル・スケッチ 123, 124）

真理の変える感化力は魂を清める。その人は神の戒めを愛し、その人が恐れることと責めることは一つである。人間を救うために払われたキリストの大いなる犠牲の中にあらわされたこのお方の愛はあらゆるへだてを取り壊す。神の愛が魂に流れ込み、感謝の気持ちで、石のように冷たかった心にわきあがる。十字架にかかられたキリスト、キリスト我らの義が心を勝ち取り、それを悔い改めに導く。この主題はとても単純なので、子供でも理解することができ、賢い者、学識のある人も引きつけられ、同時に人が決して測ることのできない力と愛と知恵の深さで真理を見つめる。わたしたちはこの尊い真理を、罪にしばりつけられている人々に示したいと願っている。すべての人に、キリストは彼らの罪のためにほふられたこと、またこのお方は彼らを救いたいと願っておられることをわからせよう。（世界総会冊子 1893 年 1 月 28 日）

聖化された筆と聖化された舌が必要であることを思い出そう。わたしたちが民として、神の喜ばれるように生きる時、わたしたちは神の御霊の深い動きを知る。そのとき真理を聞いたことのない人々のために多くのことがなされるのである。（原稿 91、1907 年）

真理の価値と神聖さ、また権威の奥深い変ることのない観念がわたしたちに浸透すべきである。（ユース・インストラクター 1893 年 2 月 2 日）

真理は栄光に満ちて勝利する

「門を開いて、信仰を守る正しい国民を入れよ。」(イザヤ 26:2)

もしもわたしたちが真理の最終的な勝利を得た征服者になりたいのであれば、神の真理を心の内に大切に保ち、主の戦いを戦う決心をしなければならない。なぜなら真理は栄光に満ちて勝利するからである。……もしあなたが他の人々にとって祝福となるよう努めているなら、神はあなたを祝福される。わたしたちが神に栄光を帰し、人類にとって祝福となることのできることをすべて、できるかぎり自分の生活に持ち込むべきである。(レビュー・アソシエイツ 1891年5月5日)

教会は、真理を宣べ伝えるための神の機関であって、特別な働きをする力を神から与えられている。もし教会がこのお方に忠実であり、そのすべての戒めに従うなら、教会にはこのお方の計り知れない恩恵が内住するであろう。教会が真実に神への忠誠をつくし、イスラエルの神、主をあがめるとき、どんな勢力もこれに対抗することはできない。

神とそのみわざに対する熱意が弟子たちを動かし、偉大な力を発揮して福音をあかしさせた。われわれも同じ情熱を心に燃やし、あがないの愛の物語を、キリスト、しかも十字架につけられたキリストの物語を語る決意をすべきではないだろうか。救い主の来臨を待ち望むばかりでなく、これを早めることがすべてのクリスチャンの特権である。

教会が世に従うことをやめて、キリストの義の衣を着る時に、教会の前には、輝かしい栄光の日の夜明けがある。教会への神の約束は、永遠に堅く立つであろう。神は教会をとこしえの誇り、代々の喜びとなさる。真理は、それをさげすみ拒む人たちを通り過ぎて、勝利する。ときには一見妨害されたように見えても、真理の前進は決して阻止されたことがない。神の使命が反対に会うと、神はその使命が一層大きな感化を及ぼすように、それに力をお加えになる。こうして聖なる力を備えた真理は、どんな堅固なとりでもつきぬけ、どんな障害にも勝利するのである。(患難から栄光へ下巻 308, 310)

生涯にわたる働き

「愛する者たちよ。わたしたちは、このような約束を与えられているのだから、肉と霊とのいっさいの汚れから自分をきよめ、神をおそれて全く清くなるのではないか。」(コリント第二 7:1)

正しい品性を形造るのは生涯にわたる働きであり、壮大な目的と一致した祈りに満ちた瞑想の当然の結果である。あなたが持つ品性の素晴らしさはあなた自身の努力の結果にちがいない。友人はあなたを励ますことはできるが、彼らはあなたのために働くことはできない。切望したり、ため息をついたり、夢見ることがあなたを偉大にしたり、良くしたりすることは決してない。あなたは登らなければならない。(ビュー・アノド・ハルド 1884年8月26日)

わたしたちが炉辺でする会話、読む本、行う取引はみなわたしたちの品性を形造る手段であり、毎日にわたしたちの永遠の運命を決定している。(ユース・インストラクター 1893年11月23日)

知的能力や英才は品性ではない。なぜなら、これらの能力は、良い品性と全く逆の品性の持主も、しばしば持っているからである。評判は品性ではない。真の品性は行為の中にあられる魂の質である。(同上 1886年11月3日)

神のみ像にかたどってつくられた品性は、この世から天国まで持って行くことのできる唯一の宝である。この世においてキリストの指導の下にある人は、すべてのきよい教養を天の邸宅にまで持って行くことができる。天国に行っても、わたしたちは絶えず進歩することになっている。(青年への使命 93)

良い品性は金や銀よりも価値のある資産である。これは危機や失敗に影響されることなく、地上の財産が押し流されてしまうその日に、豊かに利益をもたらす。高潔、堅固、忍耐はすべての人が養おうと熱心に努めるべき性質である。なぜなら、それらはそれを持つ人を抵抗することのできない力、すなわちその人が善を行うためにその人を強くする力、悪に抵抗するために強くする力、逆境に耐えるために強くする力でその人をおおうからである。(両親、教師、生徒への勧告 225, 226)

宮の建物のために磨かれた品性

「われらのむすこたちはその若い時、よく育った草木のようです。われらの娘たちは宮の建物のために刻まれたすみの柱のようです。」(詩篇 144:12)

もし青年が品性建設というこの大切な事柄を正しく認識するなら、神のみ前での調査に耐えるために自分の働きをする必要があることに気づくであろう。誘惑に抵抗し上からの知恵を求めつつ、たゆまない努力を続けることによって、最もつつましく弱い者であっても、今は不可能に思える高さにまで到達することができる。ささいな義務を果たしていくのに忠実であろうと、断固とした決意をしないなら、これに到達することはできない。悪い資質が強まるままに放っておかないためには、絶え間ない見張りを要する。若い人は道徳力を持つことができる。なぜならイエスはわたしたちの模範となって、全青年とあらゆる年令の人々に神の助けを与えるために来られたからである。(ユース・インストラクター 1886年11月3日)

この世は神の仕事場であって、天の宮で用いられるすべての石は、試みられた尊い石となって、主の建物の中のその場所にふさわしくなるまで切り刻まれ、磨かれねばならない。しかしもしわたしたちが訓練を受け、鍛錬されるのを拒むなら、わたしたちは切り刻まれ磨かれることのない石となり、ついには無用のものとして投げ捨てられてしまう。(同上 1893年8月31日)

あなたは神の宮で場所を占めることができる前に、四角くされ磨かれねばならない荒い石であって、……なされねばならない働きがたくさんあるかもしれない。神があなたのために用意してくださっている場所を、あなたが占める用意ができるまで、神が斧とのみをもって、あなたの品性の鋭い角を切り取られても、驚くには及ばない。人間はこの働きを成し遂げることはできない。これは神によってのみ行うことができる。そして神は一度であっても無駄に打つことはなさらないというのは確かである。神の一撃一撃は、あなたの永遠の幸福のために愛をもってなされる。神はあなたの無力を知っておられ、破壊するためではなく、回復するために働かれる。(教会への証 7巻 264)

宮の建物のために磨かれた品性は……永遠に主の宮殿の中で輝くことができる。(同上 9巻 37)

義人は永遠に生きる

「彼らは衣のように、しみに食われ、羊の毛のように虫に食われるからだ。しかし、わが義はとこしえにながらえ、わが救はよろず代に及ぶ。」(イザヤ 51:8)

わたしが必要としていた衣類の中で、はじめは問題なく見えたウールの服が何枚か、光に照らして完全に振ったとき、しみに穴を開けられているのに気がついた。わたしたちがよく調べなかったなら、その浸食の跡を発見しなかったであろう。しみはかすかに見分けることができるほど小さな生き物であるが、それがそこにいたというしるしは明瞭であり、しみが毛皮やウールの製品につける破壊行為は、それが目には見えぬ怪しまれなくても実際に働くものであることを示している。

このしみの、人目にはつかない破壊行為を考えると、わたしたちが知っているある人々のことを思いおこす。わたしたちがもっと良いことを期待していたその人々の外に現われた行動の中に、それまではすべての人の目に隠されていた彼らの真の品性に光があたることにより、何かが突然暴露されて、わたしたちの心がどれほど度々痛んだことであろうか。神のみ言葉の光の前にさらされるとき、その品性はしみにくわれた衣服のようであることが分り、よく振って調べると、何年も秘密のうちに進められていた破壊行為があらわれる。……

暗闇の中で非常に静かに破壊行為をすることは、しみにとって時間のかかることであった。それと同じように、子供や青年にとって、人の目からは隠れている罪の道や間違った道で、安楽で幸福であり、安心だと感じることは徐々にまた時間のかかることである。良いことであっても悪いことであっても何か一つの行為が品性を形成するのではなく、欲しいままにした思想と感情が同じ種類の行動と行為に対して道を備える。……どのような悪の道であっても最初の一步をふみ出さないよう気をつけなさい。もしあなたが神からの助けと力を求めつつ、純潔で高潔な生涯の中にあなたの品性のための土台をすえるなら、あなたの品性はしみにくわれた衣類のようではなく、堅固でしっかりとしたものとなるであろう。(ユース・ストラクター- 1886年12月15日)

神は美しい品性を最も愛される

「われらの神、主の恵みを、われらの上にくだし」てください。(詩篇 90:17 上句)

神は美しいものを愛される方であるが、このお方が最も愛されるのは美しい品性である。……滅びることなく、永遠にわたつたとぎれることなく続くのは品性の美しさである。(バイブル・エコー 1892年2月1日)

大画家であられる神は、ゆりの花に心を用いて、これにソロモンの栄光をしのぐ美しさをお与えになった。このお方は、ご自分のかたちであり栄光である人間に、どんなにかもつと多く心を用いておられることであろうか。神はご自分の子らが、ご自分に似た品性をあらわすのを見たいと熱望しておられる。日光が、変化に富んだ優美な色彩を花に与えるように、神は魂にご自身の品性の美しさをお与えになる。

キリストの愛と義と平和のみ国をえらび、このみ国の利害を、他のすべての利害にまさるものとする者はみな、天の世界に結合しており、この世の生活に必要な祝福はことごとく彼のものである。われわれは、神の摂理という本、すなわち人生という本の中に、各々ページを与えられている。そのページには、われわれの歴史が、こまかい点まで書かれていて、頭の髪の毛までかぞえられている。神の子らは神のみこころから忘れられることがないのである。(各時代の希望中巻 23,24)

どんなにりっぱであっても、世俗的なはなやかさは神の前に無価値である。神は目に見える一時的なものよりも、目にみえない永久的なものを尊ばれるのである。前者は後者を表現するときのみ価値がある。最高の芸術品の美しさも心の中に働く聖霊の実である品性の美には比較にならない。……

キリストは永遠の昔からたくわえられていた愛をもってこの世にきたり、人々の前にお立ちになったが、その愛こそわたしたちが彼とつらなることによって、これを受け、あらわし、人に分け与えねばならない宝である。……

わたしたちは世の人と異なっていなければならない。なぜならば神がご自分の印をわたしたちにおし、ご自身の愛の品性をわたしたちの身にあらわされるからである。(ミストリー・オブ・ヒーリング 17, 18)

完全・到達すべき目標

「それだから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」(マタイ 5:48)

神は、高い目標をめざすことを決心した者だけをお受けいれになる。神は、すべての人間が、最善を尽くすように義務づけられた。道徳的完全が、すべての者に要求されている。悪を行なう傾向に対しては、先天的であろうが、後天的のものであろうが、そのような傾向と妥協するために、義の標準を下げてはならないのである。品性が不完全であることは、罪であることを知らなければならない。品性のただししい属性は、ことごとく、完全な調和のとれた全体として神の中に宿っている。そして、キリストを、自分の救い主として受けいれたものは、これらの属性をみな持つ特権が与えられている。

神と共に働く者となることを願っている者は、体のすべての器官と精神の能力とを完全な状態にするように努力しなければならない。真の教育とは、あらゆる義務を遂行することができるように、体的、知的、道徳的能力を準備することである。それは、体と心と魂を神の奉仕のために訓練することである。これは、永遠の生命につながる教育である。……

とは言うものの、キリストは、品性を完成することがやさしいことであるとは、保証しておられない。高潔で円満な品性というものは、親から遺伝的にうけつぐものではない。また、偶然、ころがり込むものでもない。高潔な品性は、キリストの功績と恵みによって、人々が努力することによって得られるものである。神は、タラント、すなわち、精神の能力をお与えになる。そして、わたしたちが、品性を形成するのである。品性は、自己とのきびしい戦いによって形成される。生来の傾向に対しては、争闘に次ぐ争闘をもって当たらなければならない。わたしたちは、きびしく自己を批判して、一つとして汚点を取り除かないで放っておくようなことをしてはならない。

わたしは、自分の品性の欠点を正すことはできない、などとだれも言ってはならない。……心が清めを受けずに汚れていることと、神の支配に喜んで従わないことから本当に困難なことが生じるのである。(キリストの実物教訓 304-306)

キリストの意志に従うことは完全な人間の資格を回復することになる。(ミストリ - オブ・ヒーリング 102)

義の衣を着せられる

「彼女は、光り輝く、汚れのない麻布の衣を着ることを許された。この麻布の衣は、聖徒たちの正しい行いである。」(黙示録 19:8)

礼服は、キリストの真の弟子が持つ清くてしみのない品性をあらわしている。教会は、「しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、「汚れのない麻布の衣を着る」のである。この麻布の衣は「聖徒たちの正しい行いである」と聖書にしるされている。主を自分の救い主として受け入れるすべての者に信仰を通して与えられるのは、キリストの義であり、キリストご自身の汚れのないご品性である。……

天の織機で織られたこの衣には、人間の創意による糸は一本も含まれていない。キリストは人性をおとりになって完全な品性を形成された。そしてこの品性をわたしたちに分け与えてくださるのである。……

人が自分自身の心をキリストにささげるとき、心はキリストの心と結合し、意志はキリストの意志に没入し、精神はキリストの精神と一つになり、思いはキリストのうちにとらわれて、わたしたちはキリストのいのちを生きる。これがキリストの義の衣を着ることである。……

義とは正しい行ないである。そしてすべての者は各自の行為によってさばかれる。わたしたちの品性は、わたしたちの行ないに現われる。(キリストの実物教訓 290-292)

青少年や幼い子供たちに、天の織機で織られた高貴な衣すなわち地上のすべての聖者たちに着ることを許される「光り輝く、汚れのない麻布の衣」を自分のためにえらぶことを教えるべきである。キリストの汚れのないご品性をあらわすこの衣は、すべての人に無償で与えられる。しかしこの衣を与えられる人はみなこの世において、これを受けとって身につけるのである。(教育 294, 295)

彼らはキリストの義の輝かしいよそおいを身にまとして、王の婚宴の座につく。彼らは血で洗われた会衆に加わる権利を持つのである。(キリストの実物教訓 294)

聖徒はみ国を受ける

「いと高き者の聖徒が国を受け、永遠にその国を保って、世々かぎりなく続く。」(ダニエル 7:18)

神は、キリストの恵みによって、まずこの世で聖徒となった者、神がその人の内に実例となったキリストを見ることのできる者以外を天国に連れては行かれない。キリストの愛が魂のうちに宿る原則となる時、わたしたちは自分がキリストと共に神の内に隠れていることを悟る。……

祈り、油断なく見張り、また愛によってキリストのみ働きを行うこれらの人々だけが、神を歌声で喜ばせることができる。主がご自分の民の内にあらわされたご自分の愛する御子の品性を十分に見れば見るほど、民に対するこのお方の満足と喜びは大きくなる。神ご自身と天のみ使いたちが歌声でこの民を喜ばれる。信じている罪人は、罪がキリストの上に置かれ、代りに無実であると宣言される。キリストの義が負債者の計算書に書き込まれ、貸借対照表にあるその人の名前の反対側に次のように書かれる。許された。永遠の命。……

「あなたがたは神の畑である。人が畑の耕作を楽しんでするように、神はご自分の信じる息子、娘を喜ばれる。畑は絶え間ない労働を要する。雑草は抜かなければならず、新しい植物を植えなければならない。早く伸びすぎる枝は剪定しなければならない。そのように神はご自分の畑で働き、ご自分の植物を手入れされる。このお方はキリストのご品性の恵みをあらわしていないどのような成長も楽しむことはおできにならない。キリストの血が男女を神の尊い保護下に入れているのである。……ある植物は非常に弱いので、命を保つのがとてもむずかしい。だから主はこれらのものに特別の注意を払われる。(レビュー・アンド・ヘルド 1897年8月24日)

猶予期間に天の感化を呼吸する品性を形造った者だけが天国に入る。天に住む聖徒はまず地上で聖徒でなければならない。(サインズ・オブ・タイムズ 1892年11月14日)

神のみ約束による共有者

「また、それらのものによって、尊く、大いなる約束が、わたしたちに与えられている。それは、あなたがたが、世にある欲のために滅びることを免れ、神の性質にあずかる者となるためである。」(ペテロ第二 1:4)

神の書にあるどの約束もわたしたちが神性にあずかることができるとの励ましをわたしたちに与えている。これは可能性、すなわち神に寄り頼み、神の御言を信じ、神のみ働きを行うことができるということであり、わたしたちはこれを、キリストの神性を手に入れる時に行うことができる。この可能性は、わたしたちにとって地上のあらゆる富にまさって価値のあるものである。地上にはこれに比べることのできるものはない。わたしたちがこのように手の届く範囲にある力を手に入れるとき、非常に強い希望を受け取るので神のみ約束に完全に頼ることができる。そしてキリストの内にある可能性を手に入れることによりわたしたちは神の息子、娘となるのである。……

真にキリストを信じる人は神性にあずかる者となり、あらゆる誘惑のもとでも用いることのできる力を持つ。その人は誘惑に陥ったり、打ち負かされるままに放っておかれることはない。試練の時に彼はみ約束を主張し、このみ約束によって、欲望を通じて世界に存在している破滅を逃れる。……

わたしたちを神性にあずかる者とするために、天は最も高価な宝を与えた。神の御子をご自分の王衣を脱ぎ、王冠をはずして、この地上に赤子として来られた。このお方は幼児の時から大人になるまで完全な生涯を過ごすと誓い、御父の代表者として墮落した世に立つことを約束された。そして失われた人類のために死なれるのであった。これは何という働きであろうか。……この点についてどのように提示したら良いかわたしにはほとんど分らない。これは本当に素晴らしい、驚くべきことである。……

犠牲と不名誉な死というご自分の生涯によって、キリストはわたしたちがこのお方の神性を手に入れ、強い欲望を通じて世界に存在している破滅を逃れることを可能にしてくださった。……もしもあなたが神性にあずかっているなら、あなたは神の命で計るその命にふさわしいものを日毎に得ているのである。あなたは日々イエスに対する信頼を純粹にしていき、このお方の模範に従い、あなたがこのお方のみ前に完全な者として立つまでイエスに似た者へと成長する。(原稿 99 a 1908 年)

キリストはわたしの内に宿られる

「イエスは彼らに言われた、『よくよく言うておく。人の子の肉を食べず、また、その血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者には、永遠の命があり、わたしはその人を終りの日によみがえらせるであろう。わたしの肉はまことの食物、わたしの血はまことの飲み物である。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者はわたしにおり、わたしもまたその人におる。』」(ヨハネ 6:53-56)

イエスの肉を食べ、その血を飲むということは、キリストを自分自身の救い主として受け入れ、キリストがわれわれの罪をゆるしてくださることと、彼のうちにあるときわれわれが完全であるということとを信じることである。キリストの愛を見つめ、これについて瞑想し、これを飲むことによって、われわれはキリストの性質にあずかる者となるのである。肉体にとって食物がなくてはならないように、魂にとって、キリストはなくてはならないものである。食物は、われわれがそれを食べて、それがわれわれの生命の一部となるのでなければ、何の役にもたたない。同様にキリストは、もしわれわれが彼を自分自身の救い主として知るのでなければ、われわれにとって何の価値もないのである。理論的な知識はわれわれに何の益も与えない。キリストのいのちがわれわれのいのちとなるためには、キリストを食べ、キリストを心に受け入れねばならない。キリストの愛、キリストの恵みを同化しなければならない。(各時代の希望中巻 138)

われわれは、罪がゆるされるために、キリストを信じるというだけでは、まだ十分ではない。われわれはみ言葉を通して、キリストから来る霊的な力と栄養とを、信仰によって絶えず受けていなければならない。……「わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である」、イエスは、父の律法を受け入れ、その生活において律法の原則を実行し、心の中にその精神と恵みの力をあらわされた。……キリストに従う者は、彼の経験にあずかる者でなければならない。彼らは神の言葉を受け入れ、消化し、それが彼らの生活と行為を動機づける力となるようにしなければならない。彼らは、キリストの力によって彼のかたちに変えられ、神のご性質を反映しなければならない。(人類のあけぼの上巻 319)

われわれが聖潔な生活を送ることができるのは、カルバリーの十字架上でそそぎ出された生命を自分のために受けることによってである。そしてこの生命は、キリストのみことばを信受し、キリストが命じられたことをなすことによって、受けられるのである。こうしてわれわれは、キリストと一つになる。(各時代の希望下巻 141)

和合して共に住む

「見よ、兄弟が和合して共におけるのはいかに麗しく楽しいことであろう。」(詩篇 133:1)

クリスチャンの一致は力強いものである。それはこれを持っているものこそ神の子であることを力強い方法で語る。それは抵抗しがたい感化力をもって世に語り、人が世にある欲のために滅びることを免れ、人性において神の性質にあずかる者となることができることを示す。わたしたちは同胞とまたキリストと一つになるべきであり、ひいてはキリストのうちに神と一つになるべきである。そうすれば、わたしたちについて、「あなたはキリストにあつて完全である」という言葉を語ってもらうことができる。

贖いの計画の中であらゆる魂のために一つの場所が割り当てられており、一人一人に仕事を与えられている。誰もキリストの体の一員でありながら活動をしないことはできない。……神の民の働きはさまざまであろうが、御霊がその働きの中ですべてを動かすお方である。主人であるお方のためになされる働きはすべて大いなる全体と関連していなければならない。働き人は、神の力によって支配されている一人一人が、自分の周りにいる人々をキリストに引き寄せるために、ばらばらではない努力をしながら、互いに一致して働くべきである。すべての者がよく整備された機械の部品のように、それぞれの部品は他の部品に頼っているが、なお活動は別々にしているように、動かなければならない。そして一人一人が自分に割り当てられた場所を占め、自分に委ねられた働きをすべきである。神は、ご自分の教会員が聖霊を受け、一致と兄弟の思いやりを共にし、彼らの関心を愛で共に結びつけるようにと呼びかけておられる。

分裂と争いほど教会をはっきりと弱めるものはない。この精神ほどキリストと真理に対して戦いを挑むものはない。……

心の内にキリストが宿っている人は自分の兄弟の心の内にもキリストが宿っていることを認識する。キリストがキリストに対して戦うことは決してなく、キリストに敵対する感化を及ぼすことも決してない。クリスチャンは、それが何であつても御霊と一致して、体全体を完成するために自分の仕事をするべきである。(サイン・オブ・タイムズ 1906年12月19日)

上からの力

「しかし主を待ち望む者は新たなる力を得、わしのように翼をはって、のぼることができる。走っても疲れることなく、歩いても弱ることはない。」(イザヤ 40:31)

神の御言の保証をつかむための、青年の前にある可能性は素晴らしいものである。人間の思いは、自分が神性にあずかる者となる時、到達することのできる霊的な到達点をほとんど悟ることができない。日毎に過ちを正し、勝利を得ることによって、彼らはキリストにある賢く力強い男女へと成長する。(ユース・インストラクター 1902年2月13日)

神性にあずかる者となった人は自分の市民権が天にあることを知っている。この人はキリストの御霊からの靈感をとらえ、その魂はキリストと共に神の内に隠れる。サタンは、神の聖所である人の中に入り込んで神の宮を汚すことはできない。このような人は一步ごとに勝利を得、気高い思いに満たされる。彼はキリストが魂一人一人のために死なれたがゆえに、人類の一人一人を尊い者とみなす。

「主を待ち望む者は新たなる力を得、わしのように翼をはってのぼることができる。」主を待ち望む者は、その力強さの内にあつて力強く、大きな圧迫のもとでも堅固さを保つほど充分力強い。しかし彼はキリストの側にある憐れみと思いやりの側にたやすく身をゆだねる。キリストに服従する魂は神のみ旨を行う用意ができており、勤勉にまたへりくだってそのみ旨を知ろうと努める。彼は教義を受け入れ、自分の有限な判断に頼って歩むことを恐れる。この人は神と交わり、その会話は天にある。(手紙 58、1894年)

無限のお方と結びついて、人は神性にあずかる者となる。悪人の槍はその人には効果がない。なぜなら彼はキリストの義のよろいかぶとを身につけているからである。(両親、教師、生徒への勧告 51, 52)

研究 9

七つの封印と生ける神の印



第五の封印と第六の封印

今回は、第五の封印から見ていきましょう。

これは、ルターが聖書から「信仰による義認」を理解し、免罪符の教理に反論した 95 か条の提題を示した 1517 年から、イエスの再臨のしるしがあらわれた 1755 年までの期間にあたります。この宗教改革により、隠されていた聖書が人々の手に渡るようになり、暗黒はその光に勝つことができませんでした。

第五の封印：AD1517-1755 黙示録 6:9-11

「小羊が第五の封印を解いた時、神の言のゆえに、また、そのあかしを立てたために、殺された人々の魂が、祭壇の下にいるのを、わたしは見た。彼らは大声で叫んで言った、『聖なる、まことなる主よ。いつまであなたは、さばくことをなさらず、また地に住む者に対して、わたしたちの血の報復をなさらないのですか』。すると、彼らのひとりびとりに白い衣が与えられ、それから、『彼らと同じく殺されようとする僕仲間や兄弟たちの数が満ちるまで、もうしばらくの間、休んでいるように』と言い渡された」(黙示録 6:9-11 英語訳)。

1517 年 10 月 31 日に、ルターはラテン語で記した 95 か条の提題を、大学の習慣に従って、ウィッテンベルクの城教会の扉に貼りました。

「テツェルが売買と不敬虔な主張を続けたので、ルターはこのはなはだしい悪弊に対して、もっと効果的な抗議をする決心をした。……その前日、ルターは、すでに教会へと進んで行く群衆に加わって、免罪符の教義に反対する 95 か条の提題を書いた紙を扉にはった。彼は、この提題に反対するすべての人に対して、翌日大学において喜んで答弁することを宣言した」(各時代の争闘上巻 150)。

わたしたちの血の報復

「小羊が第五の封印を解いた時、神の言のゆえに、また、そのあかしを立てたために、殺された人々の魂が、祭壇の下にいるのを、わたしは見た。彼らは大声で叫んで言った、『聖なる、まことなる主よ。いつまであなたは、さばくことをなさらず、また地に住む者に対して、わたしたちの血の報復をなさないのですか』。すると、彼らのひとりびとりに白い衣が与えられ、それから、『彼らと同じく殺されようとする僕仲間や兄弟たちの数が満ちるまで、もうしばらくの間、休んでいるように』と言ひ渡された」(黙示録 6:9-11 英語訳)。ここで、ヨハネに示されたのは、現実ではなく、将来しばらくしたら起こることであつた[黙示録 8:1-4 引用]。(原稿 20 卷 197)。

「彼は、いと高き者に敵して言葉を出し、かつ、いと高き者の聖徒を悩ます。彼はまた時と律法とを変えようと望む。聖徒はひと時と、ふた時と、半時の間、彼の手にわたされる。しかし審判が行われ、彼の主権は奪われて、永遠に滅び絶やされ」(ダニエル 7:25-26)。

「それは、ひと時とふた時と半時である。聖なる民を打ち砕く力が消え去る時に、これらの事はみな成就するだろう」(ダニエル 12:7; ルカ 21:22 参照)。

「第五の封印が解かれたとき、黙示録の記者ヨハネは幻の中で神の言とイエスキリストの証のゆえに殺された一団を祭壇の下に見た。この後、光景は、忠実で真実な人々がバビロンから呼び出される時の黙示録 18 章に描写された光景があらわれた。[黙示録 18:1-5 引用]。』(SDA バイブル・コメンタリ [E・G・ホフ・コメント] 7 卷 968 (黙示録 6:9 コメンタリ))。

この暗黒時代に神との契約を守った人々は殺されました。

しかし、神は正義の神であられます。神はご自分のご品性(正義)を、ご自分のひとり子の犠牲という代価をもってしても擁護されます。そして、ご自分の正義を明らかにし、ご自分との契約を守ることによって殺された人々のために、裁判が行われなくてはなりません(ダニエル 7:26)。

「神は、義をもってこの世界をさばくためその日を定め、お選びになったかたによってそれをなし遂げようとされている。すなわち、このかたを死人の中からよみがえらせ、その確証をすべての人に示されたのである」(使徒行伝 17:31)。

「神のさばきの時がきたからである」(黙示録 14:7)。

「ついに日の老いたる者がきて、いと高き者の聖徒のために審判をおこなった(さばきを宣告した:NIV 訳)。そしてその時がきて、この聖徒たちは国を受けた」(ダニエル 7:22)。

「主よ、怒りをもって立ち、わたしの敵の憤りにむかって立ちあがり、わたしのために目をさましてください。あなたはさばきを命じられました」(詩篇 7:6)。

「神よ、わたしをさばき、神を恐れない民にむかって、わたしの訴えをあげつらい、たばかりをなすよこしまな人からわたしを助け出してください」(詩篇 43:1)。

「主は言われる、その日その時には、イスラエルのとがを探しても見当らず、ユダの罪を探してもない。それはわたしが残しておく人々を、ゆるすからである」(エレミヤ 50:17-20)。

「彼らをあがなう者は強く、その名は万軍の主といわれる。彼は必ず彼らの訴えをただし、この地に安きを与えるが、バビロンに住む者には不安を与える」(エレミヤ 50:33, 34)。

「それゆえ主はこう言われる、『見よ、わたしはあなたの訴えをただし、あなたのためにあだを返す。わたしはバビロンの海をかわかし、その泉をかわかす。』」(エレミヤ 51:35, 36)。

「ルターは次のように言った。『わたしは、今後 300 年もすれば必ず、審判の日が来ると確信する。神は、この邪悪な世界を長く忍ぶことはなさらないであろうし、また、おできにならないのである。』『悪虐な王国を打ち砕く大いなる日が近づいている。』」(各時代の争闘上巻 390)

「だから、どう答弁しようかと、前もって考えておかないことに心を決めなさい。あなたの反対者のだれもが抗弁も否定もできないような言葉と知恵とを、わたしが授けるから」(ルカ 21:14, 15)。

キリストの再臨の前に、契約を守った聖徒たちのためのさばきが行われます。どれほど敵が妨げようとしても、契約を守られる神が定められた時を変えることはできません。そして、その準備は「聖書、聖書のみ」によって始まったのでした。しかしヨハネは、彼らとその報復の時、すなわちさばきの時を待つように言われているのを見ました。まだ、数が満ちていないからです。ここで、わたしたちはさばきと印する働きの間接関係を考慮する必要があります。

その後、イエスの預言通り、再臨の近いことを告げるしるしが与えられました。

第六の封印:AD 1755- 再臨 黙示録 6:12-17

「小羊が第六の封印を解いた時、わたしが見ていると、大地震が起って、太陽は毛織の荒布のように黒くなり、月は全面、血のようになり、天の星は、いちじくのまだ青い実が大風に揺られて振り落されるように、地に落ちた。天は巻物が巻かれるように消えていき、すべての山と島とはその場所から移されてしまった。地の王たち、高官、千卒長、富める者、勇者、奴隷、自由人らはみな、ほら穴や山の岩かげに、身をかくした。そして、山と岩とにむかって言った、『さあ、われわれをおおって、御座にいますかたの御顔と小羊の怒りとから、かくまってくれ。御怒りの大いなる日が、すでにきたのだ。だが、その前に立つことができようか。』」(黙示録 6:12-17)。

再臨のしるし

「また日と月と星とに、しるしが現れるであろう。そして、地上では、諸国民が悩み、海と大波とのとどろきにおじ惑い、人々は世界に起ろうとする事を思い、恐怖と不安で気絶するであろう。もろもろの天体が揺り動かされるからである。……これらの事(それぞれの封印が解かれること)が起りはじめたら、身を起し頭をもたげなさい。あなたがたの救が近づいているのだから」(ルカ 21:25, 26, 28)。

聖書で8人の著者が、終わりの日のさきがけとして太陽、月、星におけるしるしを述べています。このうち4人、すなわちヨエル、アモス、イザヤ、そしてエゼキエルはキリストの時代の前に記しました。他の4人はマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネで、彼らのうち3人は救い主ご自身によって語られた言葉をくり返しています。

「地は彼らの前におののき、天はふるい、日も月も暗くなり、星はその光を失う。主はその軍勢の前で声をあげられる。その軍隊は非常に多いからである。そのみ言葉をなし遂げる者は強い。主の日は大いにして、はなはだ恐ろしいゆえ、だれがこれに耐えることができよう」(ヨエル 2:10-11)。

「主なる神は言われる、『その日には、わたしは真昼に太陽を沈ませ、白昼に地を暗くし』」(アモス 8:9)。

「天の星とその星座とはその光を放たず、太陽は出ても暗く、月はその光を輝かさない……」（イザヤ 13:10）。

「わたしはあなたを滅ぼす時、空をおおい、星を暗くし、雲で日をおおい、月に光を放たせない」（エゼキエル 32:7）。

「しかし、その時に起る患難の後、たちまち日は暗くなり、月はその光を放つことをやめ、星は空から落ち、天体は揺り動かされるであろう……」（マタイ 24:29）。

「その日には、この患難の後、日は暗くなり、月はその光を放つことをやめ、星は空から落ち、天体は揺り動かされるであろう……」（マルコ 13:24-25）。

「また日と月と星とに、しるしが現れるであろう。……」（ルカ 21:25）。

「小羊が第六の封印を解いた時、わたしが見ていると、大地震が起って、太陽は毛織の荒布のように黒くなり、月は全面、血のようになり、天の星は、いちじくのまだ青い実が大風に揺られて振り落されるように、地に落ちた。天は巻物が巻かれるように消えていき、すべての山と島とはその場所から移されてしまった」（黙示録 6:12-14）。

「預言は、キリスト再臨のようすと目的を予告するだけでなく、人々がその近づいたことを知るように、しるしも与えている。……。黙示録の記者も、再臨に先だつ第一のしるしをこのように描写している。『大地震が起って、太陽は毛織の荒布のように黒くなり、月は全面、血のようにな』った。こうしたしるしは、19世紀の開始前に起こった。この預言の成就として、1755年に、これまでの記録を破る恐ろしい地震が起きた。これは、一般にリスボンの地震と言われているが、ヨーロッパの大部分、アフリカ、アメリカにも及んだ。グリーンランド、西インド諸島、マデイラ島、ノルウェー、スウェーデン、大ブリテン（英国）、アイルランドでも感じられた。その範囲は、4百万平方マイルに及んだ。アフリカでは、ヨーロッパと同様の激震であった。アルジェは大半崩壊した。そしてモロッコ付近の、8千から1万人ぐらいの人口をもっていた村が陥没した。スペインとアフリカの沿岸には、高波が押し寄せて町々をのみ尽くし、大きな破壊をもたらした。

地震が特に激しかったのは、スペインとポルトガルであった。カディスでは、押し寄せる波の高さが、60フィート（約18メートル）もあったという。『ポルトガルの高山のいくつかは、あたかもその根底から覆えされるかのように、猛烈に震動した』……『地震は聖日に起こり、教会や修道院は人々でいっぱいだったが、

逃れた者はほとんどいなかった』(Encyclopedia Americana, art. "Lisbon," note (ed. 1831)). ……この恐るべき日に生命を失った人の数は、九万と推定されている」(各時代の大争闘上巻 391-393)。

「日と月が暗くなるという預言の次のしるしは、その25年後にあらわれた。このしるしに関してさらに驚くべきことは、その成就の時が明確に示されていたことである。救い主は、オリブ山上で弟子たちと語り、教会の長い試練の期間、すなわち、1260年間にわたる法王権の迫害について述べ、その苦難は短くされると約束された。それから、再臨に先だって起こる諸事件をあげて、その最初のものがいつ起こるかを定められた。「その日には、この患難の後、日は暗くなり、月はその光を放つことをやめ」(マルコ 13:24)。1260日、すなわち1260年は、1798年に終わった。その4半世紀前に、迫害はほぼ完全にやんでいた。キリストの言葉によれば、この迫害のあとで日が暗くなるのであった。1780年5月19日に、この預言は成就した」(各時代の大争闘上巻 393)。

「1833年11月14日付ニューヨーク「商業新聞」には、このふしぎな現象についての長文の記事が載ったが、そこには次のようなことが書いてあった。「昨朝のようなできごととは、どんな哲学者や学者も、語ったこともなければ記録したこともなかったであろう。もしわれわれが、星が落ちるということを流星と解釈するならば、1800年前の預言者が、それを正確に預言したのである……これ以外の言葉では表現できないような言い方で」(各時代の大争闘下巻 23)。

「イエスは、「星は空から落ち」と言われた(マタイ 24:29)。ヨハネも黙示録の中で、神の日の到来を告げる光景を幻に見て、「天の星は、いちじくのまだ青い実が大風に揺られて振り落されるように、地に落ちた」と言った(黙示録 6:13)。この預言は、1833年11月13日の大流星雨によって、顕著にまた印象的に成就した。……

こうして、イエスが弟子たちに言われた再臨に関する最後のしるしが、あらわされた。「そのように、すべてこれらのことを見たならば、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい」(マタイ 24:33)。これらのしるしのあとで、ヨハネは、天は巻き物が巻かれるように消えていき、地は震い、山と島とはその場所から移され、悪人は恐れて人の子の前から逃げるといふ、その次の大事件を見た(黙示録 6:12-17 参照)。(各時代の大争闘下巻 22, 23)。

「主の来臨の約束はどうなったのか。……ある人々がおそいと思っているように、主は約束の実行をおそくしておられるのではない。ただ、ひとりも滅びること

がなく、すべての者が悔改めに至ることを望み、あなたがたに対してながく忍耐しておられるのである。しかし、主の日は盗人のように襲って来る。その日には、天は大音響をたてて消え去り、天体は焼けてくずれ、地とその上に造り出されたものも、みな焼きつくされるであろう。このように、これらはみなくずれ落ちていくものであるから、神の日の到来を熱心に待ち望んで（早めて）いるあなたがたは、極力、きよく信心深い行いをしていなければならない。その日には、天は燃えくずれ、天体は焼けうせてしまう。しかし、わたしたちは、神の約束に従って、義の住む新しい天と新しい地とを待ち望んでいる。愛する者たちよ。それだから、この日を待っているあなたがたは、しみもなくきずもなく、安らかな心で、神のみまえに出られるように励みなさい」（ペテロ第二 3:4, 9-14）。

「地震、大竜巻、火事、洪水による破壊、人命財産の大損害などを、なんと度々耳にすることであろう。一見、こうした災害は、人間の力を超えた自然の猛威が突発的に起こしたものであると思われるであろう。しかし、その中であって、神のみこころを悟ることができるのである。神は、こうした方法によって、人々に、彼らの危険を自覚させようとしておられるのである」（国と指導者上巻 244）。

「キリストの来臨はわたしたちが始め信じた時よりも近づいている。大争闘は終わりに近づいている。神のさばきが地にある。それらは厳粛な警告のうちに次のように語っている、『だから、あなたがたも用意をしていなさい。思いがけない時に人の子が来るからである』（マタイ 24:44）。」（教会への証 8 巻 252）。

「悩みの時がわたしたちの前にある。神のさばきは、地に広く行われている。災害が矢継ぎ早に起こっている。まもなく神は、地を恐るべくふるい、住民をその悪のゆえに罰するためにご自分の場所から立ち上がられるのである。そのとき、このお方はご自分の民のために立ち上がられて、彼らに保護をお与えになる。このお方はご自分のとこしえのみ腕で彼らを囲い、かくまってください」（レビュー・アンド・ハールド 1904 年 4 月 14 日）

「主が立って地を脅かされるとき、人々は岩のほら穴にはいり、また地の穴にはいって、主の恐るべきみ前と、その威光の輝きとを避ける」（イザヤ 2:19, 21）。

わたしたちは今、イエスの再臨の時に生存しているのです。

(48 ページの続き)

宮にこられたとき、働いている祭司たちをごらんになりました。礼拝者が祈るためにひざまずいたとき、イエスさまも彼らと共に頭をたれ、このお方の声は讃美の歌に変わりました。

毎朝夕、小羊が祭壇(さいだん)の上でささげられました。これは救い主の死を表していました。子供のイエスさまが罪のない犠牲をごらんになったとき、聖霊はイエスさまにその意味を教えました。このお方はご自身が神の小羊として罪人のために死ななければならないことをお知りになりました。

このような思いを心にいだきながら、イエスさまは一人になりたいと望まれました。そこで、このお方は宮で両親と共にはおられず、彼らが家に帰りはじめたときも、このお方は一緒におられませんでした。

宮とつながっている部屋にはラビによって教えられている学校がありました。そしてしばらくのちに、その場所に子供のイエスさまがこられました。このお方は偉大な教師の足元に、ほかの若者たちと共にすわり、彼らの言葉に耳をかたむけました。

ユダヤ人はメシヤについての多くの間違っただけの考えをもっていました。イエスさまはそれらを知っておられましたが、学者に反論なさいませんでした。教えを受けること望む者として、このお方は預言者の記したことについて質問されました。

イザヤ 53 章では救い主の死を述べていますが、イエスさまはこの章を読んで、その意味を質問なさいました。

ラビたちは何も答えることができませんでした。彼らがイエスさまに質問しはじめました。そして彼らはこのお方の聖書の知識に驚いたのでした。

彼らはこのお方が、自分たちよりもはるかによく聖書を理解しておられることがわかりました。彼らは自分たちの教えが間違っていたことがわかりましたが、他のことを信じようとは思いませんでした。

イエスさまはとてもひかえめでやさしかったので、彼らはこのお方に怒りませんでした。彼らはこのお方を生徒としてひきとめ、自分たちと同じように聖書を説明することを教えたいと望みました。(つづく)

カウザ・レ・イエナ (野菜のカウザ)

ペルー料理

【材料】

じゃがいも	8 個	レモン (しぼり汁) 3 個分	
塩	小さじ 3/4	ピーツ	2 缶
にんじん	4 本	いんげん	10 本
にんにく	4 片	タカのつめ	少々
豆乳	2 カップ	サラダ油	大さじ 3
塩	少々	ガーリックパウダー	少々
イタリアンパセリ	1 束	グルテン (8 月号ご参照)	

【作り方】

1. グルテンを細かく切って、レモンのしぼり汁と塩を少し加えます。
2. にんじん、ピーツ、いんげんを切らずに煮て、煮たあとに皮をむき、7-8 ミリくらいの角切りにします。
3. 豆乳をミキサーに入れ、回しながら、サラダ油を細く上から注ぎ入れていきます。そのあとに塩少々、レモン汁小さじ 1、ガーリックパウダーを少々入れて、回します。豆乳とサラダ油とレモンはいずれも新鮮なものを使用してください。そうしないとマヨネーズのようになりません。
4. 他の器に角切りにしたにんじん、ピーツ、いんげんを入れて、マヨネーズを和えます。
5. イタリアンパセリを細かく切ります。
6. じゃがいもをゆでて、マッシュします。
7. にんじん 2 本を煮て、マッシュします。
8. ニンニクをすってしぼり汁を取り、これをマッシュしたにんじんの中に混ぜ込みます。
9. さらに、これをマッシュしたじゃがいも、レモン 2 個分のしぼり汁、塩とよく混ぜ合わせます。きれいな色に変わります。
10. 二つに分けて、半分をガラスの容器に敷きます。
11. その上にグルテンを敷きます。
12. イタリアンパセリを敷きます。
13. マヨネーズで和えた野菜を敷きます。
14. もう半分のジャガイモをのばして、その上に敷きます。
15. その上にパセリをかけて飾ってできあがり。

ペルー料理のご紹介です。とても鮮やかなごちそうですよ。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校 : 9:30-10:45 (公開放送)

礼拝説教 : 11:00-12:00 (公開放送)

午後の聖書研究 : 14:00-15:00

【公開放送】 <http://www.4angels.jp>



聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理

お申込先 : 〒 350-1391 埼玉県狭山郵便局私書箱 13 号「福音の宝」係
是非お申し込み下さい。



書籍

【永遠の真理】 聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。



【安息日聖書教科】 は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。



イエスの物語

第9話 イエスさまの子供時代(II)

過越(すぎこし)の祭(まつり)

毎年、ヨセフとマリヤはエルサレムへ過越の祭のために上京していました。イエスさまが12歳のとき、彼らはイエスさまも連れていきました。

これは楽しい旅でした。人々は徒歩や、もしくは牛やロバに乗って旅をしましたが、そこへ行くには数日かかりました。ナザレからエルサレムまでの距離はおよそ70マイルでした。全国各地から、さらにはまた他国からも、人々がこの祭に参加しました。そして同じ場所から来た人々はたいいて一緒に旅をして、大きなグループになりました。

祭は三月の終わり近く、もしくは四月の初めに開かれました。このときパレスチナは春の季節で、全地は花々で明るく、鳥たちのよこばしい歌がひびいていました。

彼らが旅をしている間、親は自分の子供たちに、過去、各時代にわたって神さまがイスラエルのためになされた数々のすばらしいことを語りました。そして、しばしば彼らはダビデの美しい詩篇を共に歌いました。



キリストの時代に、人々は神さまへの礼拝においてだんだん冷たく形式的になっていました。彼らはこのお方のいづくしみ深さよりも、自分たちの楽しみのことを多く考えていました。

しかし、イエスさまはそうではありませんでした。このお方は神さまについて考えることが好きでした。このお方は

(45 ページに続く)